

## 「鬼と闇」断章

綱澤満昭

谷崎潤一郎は、北京に滞在していた頃体験した暗黒の夜の恐怖について次のように記している。

「家の中からは一定の灯影もこそと云う人声も洩れるではなく、無気味な廃虚のような壁が暗い中に黙然として続いている。その壁と壁との間に屈曲した狭い小路を、私は始め何気なく歩いてしたが、何処まで行っても闇があまり濃く、あまり静かなので、間もなく云い知れぬ怖れを感じて、何かに追いたてられるように走って抜けたことがある。けだし、近代の都会人はほんとうの夜というものを知らない。いや、都会人でなくとも、この頃はかなり辺鄙な田舎の町にも鈴蘭燈が飾られる世の中だから、次第に闇の領分は駆逐せられて、人々は皆夜の暗黒というものを忘れてしまっている。」<sup>1</sup>

続けて谷崎は、夜の今昔についてこんなことをのべ

ている。

「現代の夜が太陽光線以上の眩惑と光彩とを以て女の裸体を隈なく照らし出すのに反して、古えの夜は神秘な暗黒の帳を以て、垂れこめている女の姿をなおその上にも包んだのである。かの渡辺綱が戻橋で鬼女に逢ったり、頼光が土蜘蛛の妖精に襲われたりしたのは、こういう凄まじい夜であつたことを念頭におく必要がある。」<sup>2</sup>

不夜城を是とし、光と明るさこそが近代日本の文明的象徴のごとくなっているいま、その裏側ともいうべき、漆黒の夜は消えたかに思える。

暗闇ほど、光にとっての恐怖はないのであるが、近代という光は、この暗黒を呪縛の空間と呼び、そこからの脱却、解放こそが、人間の幸福の鍵だという神話を創造してしまった。つまり、闇を暴き、闇からの脱

出という行為に絶対的価値を置くことに、いささかの疑いも持たなくなった。

闇は魍魎魍魎が跋扈し、おぞましき恐怖と呪縛の空間であり、「善良」な人間を奈落の底に突き落とすものであるとの認識を正常なものとして受け入れて平然としていることが、今日の常識になっている。

いつの時代でも、王権は輝く陽の光を全身に浴びて、闇を追放するという「正義」に血道をあげる。

したがって、それへの反逆者、つまり、まつろわぬ者には、神聖を冒瀆する無頼の徒としての烙印が押され、追放され、抹殺されてゆく運命が待っている。

まつろわぬ鬼にとって、陽光の世界はあまりにも眩しすぎ、とても住めるような場所ではない。鬼の栖はどこまでも暗黒の世界でなければならず、一番鶏が鳴いたら、鬼は即刻退散しなければならぬのである。退散し、それぞれの闇に隠れた鬼を王権は今度は強烈な光と熱で焙り出そうと懸命になる。突き落としたり、焙りだしたりいわゆる鬼退治である。しかし、ひ弱い鬼の降参ははやいが、大物はそうはいかない。続いたかにみえる静謐の世に突如として大物は現出する。土中に埋まった錆ついた地雷のごとく、爆発の時を待つ

ている。

『御伽草子』の「酒吞童子」は次のようにはじまる。

「昔わが朝のことなるに、天地開けしこの方は神国といひながら、又は仏法盛んにて、人皇のはじめより延喜のみかどに至るまで、王法ともにそなはり政すなおにして、民をもあわれみ給ふこと、堯舜の御代とてもこれにはいかでまさるべき。しかれども世の中に不思議な事の出て来たり。丹波国大江山には鬼神のすみて日暮るれば、近国他国の者迄も、数をも知らずとりて行く。都の内にてとる人は、みめよき女房の十七八を頭として、是をもあまたとりて行く、<sup>3</sup>」

日本という国は、天皇を中心とした神道の国であると同時に、仏教も津々浦々にまで浸透し、神武天皇の時代から延喜のみかど、つまり、醍醐天皇の時代に至るまで、隣国中国にも例をみないほどの平和が続いた国であるのに、まさしく晴天の霹靂のごとく、獰猛な鬼が出現したのである。金銀財宝を盗み、美女をかどわかし、人肉を酒の肴にしながら、わが世の春を謳歌しているという。

権力、および権力によって飼いならされた人間どもの日常的行為とは、大きくずれたところに鬼の日常性

はある。人間の日常を厳しく峻拒しながら生きているのだ。この強力な魔力、エネルギーがなければ鬼ではない。「善良」な人間どもが知恵をしぼりながら蓄積したかにみえる「善」や「正義」や「倫理」をことごとく、徹底的に峻拒し、否定してゆく。鬼とはそういう存在である。表面的な前提として、鬼はそういう存在である。表面的な前提として、鬼は次のような存在であると認識しておいて間違いいではない。

「人間がしないことをするのが鬼だと考えたほうがいいでしょう。基本的には人間の裏返しの属性を持っているもの、ある意味では社会的な秩序のイメージ、道徳的人間のイメージがあるとしたら、一方に反社会的なイメージ、反道徳的な人間の非人間的イメージとしての鬼のイメージをつくってゆく。：(略)：人間は朝起きて夜寝るが、鬼は逆です。夕方現れて、朝退散す。しかも人間はまじめに働くが、鬼たちは働かないのです。」<sup>4</sup>

鬼は時代的、社会的背景によって、その姿を変貌させながら生きる。鬼が姿を変えらるということは、人間の置かれた状況が様々な鬼をかたちづくるといふことなのだ。人間と鬼とは相関関係にあつて、鬼が単独で

その姿をつくり、行動するわけではない。時代や社会は様々な鬼を舞台に登場させては、抹殺し、抹殺しては登場さす。

強弱の差はあるが、王権によって必要不可欠の鬼が多いことに、まずわれわれは注目すべきであろう。鬼をつくり、鬼を討伐しなければ生きられない人間どもが存在するということである。

ある一つの王権体制を長期にわたって、維持してゆくとために、あるいはまた、次第に衰弱してゆくその体制に、活力を与え、復活させ、さらにそれを強化させてゆくために、権力は、様々な手段、手法を考案し、選択する。その選択肢の一つとして、苛めの対象を用意することは、体制側の常套手段である。その苛めの対象の一つが鬼であり、鬼的要素を持った人々である。閉じ込められたり、排除されたり、その都度鬼は翻弄されることを運命とする。その時々必要に応じて権力は、自由に操作出来る鬼を創造し、養う。やっかいな鬼もあえて登場させる。王権が王権として、その権威を体制を、維持する際の、必須条件の一つとして欠かせないのは、その王権自体を、かなりのところまで攻めあげる反王権的行為であることを知らねばならぬ

い。従順なものだけで足りりとしてはならないのである。王権は、他を寄せつけない強大な弾圧的エネルギーを持たねばならないのは当然であるが、それだけで成立、維持されているものではない。そうかといって春風駘蕩のうち存する農耕儀礼や祖先崇拜を絶対的基盤とするものでもない。

王権体制に反逆し、失敗して糾弾され、配流され、場合によっては抹殺されてゆく非運の主人公を、わが体制内部から捻出しなければならぬのである。一歩間違えば、己の身が危険であるところまで、攻撃させ、しかし、最終的には、それを包み込んでしまうところに、王権のもっている呪縛構造の本質がある。

したがって、反対勢力、異端児、つまり鬼になるべきものの不在の体制は、安全かつ強国にみえはするが、実は柔軟性に欠けた極めて脆いものだということを、権力の歴史は教えている。

王権は己の身に危機がせまっているとの自覚があれば、いつ、いかなる場でも、己に近い存在である身内までも鬼に仕立て、異端者として攻撃し、潰しにかかる。体制安泰のために、あえて、正統な王権体制から疎外された主人公を創造する。悲劇の主人公を身内か

ら捻出する。捻出された主人公は、かなりのところまで王権に反逆する。日本の天皇制国家も例外ではない。この悲劇の主人公に対して天皇は直接かわることはしない。政治と宗教を巧みに使いわけ、そういう場合は、天皇は安全地帯とも呼ぶべき宗教の世界に逃げ込む。横死していった側近たちの霊は、怨霊となって激しい暴力も辞さないが、最終的には和霊となり、権力に協力するという運命にある。

ところで、この凶悪で強力なパワーを持った鬼は、常に王権の側、権力の側によって創造され、利用され、抹殺されて、おわりというものなのか。そうではない。蹂躪され、抑圧され、忍従を余儀なくされてきた多くの民衆にとって、超人的パワーを発揮する鬼は恐怖の対象であると同時に、憧憬の対象でもあり、なんとしてもその威力を借用したいと願う存在でもある。

尋常な手段での解決方法を奪われてしまった弱者は忍従するか、日常の規範を逸脱したところで、闘うしかない。敵が支配のために作為した諸々の手段を、そのまま使用したのでは勝目はない。

いかに反倫理的行為と喧伝されようとも、苦渋に満

ちた日常を強いられている被支配者たちの特権は、そのことの自覚のなかになければならない。

反権力、反権威、反秩序、反倫理は鬼の属性である。ここに存在する「反」の魔力を借用し、また鬼そのものになりきる以外に、日常的怨念を晴らす道のないのが、民衆のやりきれない想念である。

世俗的人間の模範とされている聖人、君主、僧侶などの言動に、鬼はいささかも教導、感化されてはならないのである。働く人が生産したものを掠すめ取ることを生業とする聖人、君主、僧侶らを不要な存在だと断定した農本的アナーキストを想起すべきである。

鬼の魁ともいえる酒吞童子は、多くの僧侶を殺し、仏教界の大人物である空海、最澄もエセ僧侶だと罵倒する。

酒吞童子は源頼光らと共飲し、酔いがまわったところで、己の過去を次のように語りはじめる。

「本国は越後の者、山寺育ちの児なりしが、法師にねたみあるにより、あまたの法師を刺し殺し、その夜に比叡の山に著き、我すむ山ぞと思ひしに、伝教といふ法師仏たちを語らひて、わが立つ杣とて追ひ出す。力及ばず山を出で、又此峯に住みし時、弘法大師とい

ふえせもの、封じてここをも追ひ出せば、力及ばぬ處に、今はさやうの法師もなし。高野の山に入定す。今またここに立ち帰り、何の子細も候はず。都よりもわがほしき上藤達を召し寄せて、思ひのままに召し使ひ、座敷の体を御覽ぜよ。」<sup>5)</sup>

この酒吞童子の語りの意味は小さくはない。妬みのよつてきたるところを語ってはいないが、なんとかして正しい道を歩もうとすればするほど、仏教的に作為された規範と常識で綴いあげられている日常に、してやられた酒吞童子の怨を汲み取ることは困難なことではない。

おぞましき倫理や道徳と衝突し、結果として、非常識人、反社会的人間という烙印を押され、元へは戻れぬ状況に追い込まれたこの鬼の怨念を誰が責められようか。

正しきものに最大の恐怖の感情を抱くのは、阿漕と狡知で塗りつぶされた日常を持つ権力そのものである。鬼を追い払う行事として、「追儼」があるが、沢史生はこの「追儼」を次のように説明している。

「追儼は元々が中国の行事であったが、奇妙なことに『儼』の字義には、『疫鬼』もなければ『悪鬼』も

ない。『節度正しく歩む』が『儼』の持つ本来の意味である。追儼は疫鬼を追い出すためではなく、節度正しく歩む者を排除するのが行事の真相であったのかもしれない。：（略）：私利私欲に根ざして、政治を壟断する者にとって、節度をもって正しく践み行なう者のごときは、煙たい以上に邪魔な存在である。：（略）：このように眺めると、悪いヤツに擬される鬼は、実は節度正しく行なう姿勢を崩さなかったために、滅ぼされた神であったのではないかと考えることができる。」

正しき歩みぶりをする人間がいては困るのは、スケールの大小は別として、互いに脛に傷を持つ権力集団、悪辣集団そのものである。「福は内、鬼は外」が一般的であるが、「福は内、鬼も内」という地域における鬼と民衆との深いつながりを読み取る必要がある。鬼の子孫であることを誇りに抱いて生き、それを弾機として苦難の道を打破せんとして生きる人がいても、なにも不思議なことではない。

柳田国男は「山人考」のなかで次のような例をあげている。

「鬼といふ者が愁く、人を食い殺すを常識とするよ

うな凶悪な者のみならば、決して発生しなかったらうと思ふ言ひ伝えは、自ら鬼の子孫と称する者の、諸国に居住したことである。其一例は九州の日田付近に居た大蔵氏、系図を見ると代々鬼太夫などと名乗り、屢々公の相撲の最手にめされました。：（略）：それよりも今一般と顕著な実例は、大和吉野の大峰山下の五鬼であります。洞川という谷底の村に、今では五鬼何という苗字の家が五軒あり、所謂山上参りの先達職を世襲し聖護院の法親王御登山の案内役を以て、一代の眉目とした。」<sup>7</sup>

民衆すべてが鬼は敵であると断定したのでは、こういうことは考えられないことである。

勝者の傲慢と偽善とが罷り通り、社会のすみずみまで、そのための言語、風習、倫理、規範でおおわれている現実社会にあつて、敗者の側が己の歩みをつかむのは至難のわざである。いたる所に邪魔が入り、道は遮断される。尋常な手段の無効性を認識した人たちは、鬼の魔力を恐怖しつつも、それを憧憬し、それへの依存を期待する。追いつめられ、踏みにじられて生きる人間の正義を切り拓く道はどこにあるというのである。鬼は闇の中から、光明における人間どもの数々

の所業を凝視している。時代の方向が光明の拡大を是とする時、鬼はその方向を峻拒し、逆を信じて生きる。子や孫に看取られて豊の上で往生し、小高い丘の上から子孫の幸福と繁栄を見守るような空気のなかで鬼は生きてはいない。

抹殺される瞬間に人は鬼になる場合がある。鬼の現代版の一つであるが、二・二六事件の首謀者の一人磯部浅一は、怒髪天を突く思いで、次のように叫んでいる。

「八月一日。何をヲツ！ 殺されてたまるか、死ぬものか、千万発射つとも死せじ、断じて死せじ、死ぬことは負けることだ、成仏することは譲歩することだ、死ぬものか、成仏するの何か。悪鬼となって所信を貫徹することだ、ラセツとなつて敵類財カイを滅尽するのだ、余は祈りが日々に激しくなりつつある。余の祈りは成仏しない祈りだ。悪鬼になれるように祈っているのだ。優秀無敵なる悪鬼になるべく祈っているのだ、必ず志をつらぬいて見せる、余の所信は一分も一厘も譲歩もしないぞ。完全に無敵に貫徹するのだ、妥協も譲歩もしないぞ。」

磯部は是が非でも悪鬼になりたいのである。人を誑

かし、人を食すといわれる羅刹になることを本心から願っているのだ。それ以外に活路はない。この願いは、なにも一青年将校だけのものではなからう。陰謀讒言によって理不尽な辛酸をなめさせられ、遂に死を強要されていった人たちがすべてが共有するものである。彼らは鬼となって、勝者の裏にかくされた矛盾を摘発し、息の根を止めなければならぬのである。鬼の持つ強力なパワーこそが頼りである。

今日、強力な鬼は存在するか。鬼の現状は、そして将来は。馬場あき子はこうのべている。

「現代に〈鬼〉は作用しうるか。近世にいたって鬼は滅びた。苛酷な封建体制は、鬼の出現をさえ許さなかったのである。そこでは、鬼は放逐される運命を負うことによつてのみ農耕行事の祭りに生き、折伏され、誅殺されることによつてのみ舞台芸術の世界に存在が許された。祭りや、歌舞の形式の中に埋もれつつ、その本来的エネルギーも圧殺寸前の状態となっている現在、最後の叫びを上げているような〈鬼〉のすがたに、私は限りない哀れを覚える。それとともに、機械化の激流の中で、衰弱してゆくほかない反逆の魂の危機を感ずる。」

追放され、誅伐されるという条件、前提のもとでしか、祭りにも演劇にも登場を許されぬ鬼の姿と心情に、馬場は、深い哀痛の念を抱いている。

鬼の原点ともいうべき反逆の牙は抜かれ、角は折られ、精気もなく、非暴力的空気がこの世に充滿している。このことは、鬼になりきって、社会的矛盾、権力者の横暴に対して、徹底的な闘いを挑む情念を私有せんとする気持が、社会全体を通じて枯渇、死滅していることの証拠である。暴力的熱気の意志を失った鬼にレーゾン・デートルはない。権力にまつろわぬことをもって、その本来の使命とする鬼は、他からの同情や慰めなどを、いささかも期待してはならない。漂泊者であること、孤独であること、アウトローであることを恐れることなく、世俗的常識を断固として拒絶しなければならぬ。王権が用意する倫理、道徳などといった毒饅頭を間違っても食ってはならない。しかも、そこに気負いや無理があつてはならず、ごく自然体でそうあらねばならないのである。そのためには、過酷な自己規制の繰り返しがある。妥協は許されぬ。世俗的秩序、規範を超越したところで生き、正義正道を執拗に飲み込まねばならないのである。

ところで、日本は稲作の国として認知され、稲作文化一元論が当然のことに信じられてきた。ということは、稲作以前の文化への関心が、それだけないがしろにされてきたともいえる。傍若無人に稲作の拡大原理が押し通され、稲作があらゆる面で正義の旗を振り、権力はそれを国是としてきた。狩猟採集を基本とする縄文の文化は、次々と後退を余儀なくされ、ついには抹殺される運命を辿る。王権の拡大、維持にとって、水田稲作は極めて好都合であった。次のような発言に注目する必要がある。

「権力者が最も御しやすい対象は農民であった。それも弥生文化がもたらした水田農耕の民である。焼畑農耕には漂泊性がついて回ったが、水田農耕には良田に仕上げる根気が必要とした。一年でも休耕しようものなら、田はたちまち荒廢する。手を緩めることはできない。当然ながら田をつくる農民たちは、水田の周辺に定着しなければならなかった。…(略)…王権は定着農耕を絶好の王化手段に選んだ。戸口に編入して定着させる。居住地からの離脱、つまり亡命逃散は、これを罪と見なし処罰する。これによって権力者は、

否応なく農民からの年貢を吸収することができた。<sup>10</sup>」

水田稲作の拡大の背景には様々な理由があるが、その一つに強い政治的意図があったことは明らかである。稲という植物を東北など寒冷地に拡大栽培するについては物理的にいっても難澁を極めたと思われる。武力による強引な策もしばしばあったことが推察出来る。稲作民と非稲作民との激しい闘い、血ぬられた悲劇と飢餓の歴史の展開がそこにはあった。国津神と天津神の闘い、縄文と弥生の闘い、西南と東北の争いについてもよからう。非稲作民には、敗北、同化、自死、逃走が残された道であり、跪跌と敗北の歴史がその人たちの歴史であった。

稲作を基盤にして成立している王権にとって、稲作になじまぬ者は遺棄され、抹殺されてしかるべき鬼となったのである。平地を追われ、山に隠れ、漂泊を余儀なくされた鬼たちは、王権の支配する文化とは異質のものを厳守しつつ、怨念を心中深く溜め込みながら、ひっそりと生きる。

柳田国男が「山人」と呼んだ人たちの生活も、そのようなものとしてあったのかもしれない。彼は「山人外伝資料」のなかで、山人の由来と末路についてこう

のべている。

「私は今存する限の史料に依り次の如く想像して居る。山人とは我々の祖先に逐はれて山地に入込んだ前住民の末である。彼等の生活は平地を占拠して居た時代にも至つて粗野なものであったが、多くの便宜を侵入民族に奪はるゝに及んで更に退歩した。殊に内外の圧迫が漂泊を余儀なくさせた為に、彼等は邑落群居の幸福を奪はれ、智力啓発のあらゆる手段を失つた。<sup>11</sup>」

既存の民の土地に侵入し、強奪してゆく側が正義と呼ばれ、奪われ、抵抗する側が悪、無法、反逆と呼ばれる。

ところで、この稲作を基盤とした王権が、いまひとつ恐怖しつつも、憧憬し、喉から手が出るほどの思いを抱いたものには鉄がある。農機具として武器として、鉄は国統治の要であった。それゆえ鉄収奪はその激しさを極める。王権と鉄生産集団との格闘には想像を絶するものがあつたと思われる。鉄生産にかかわる集団の風俗習慣は、稲作集団のそれとは異質のものである。この文化の違いを巧みに利用しつつ王権はそれを一つの攻撃の理由にする。

水田稲作を核とする村落共同体を細胞として構築さ

れている農耕国家にとって、鉄生産者の存在は、じつに特殊な技術者集団と映った。鉄もその生産技術も絶対的に必要なものであるにもかかわらず。

豊葦原の瑞穂の国が、鉄の収奪に血道をあげることになるのは、必然であった。一本の木も草も、一握りの土も、これすべて天皇制農本国家のものであって、異質文化所有者に分与するものは皆無だとの厳令がくだる。鉄生産者と稲作農民との分断を巧妙に作為しながら、王権は鉄収奪に奔走する。

日本各地に、鬼伝説は散在するが、その地域が鉱山所在地であったことを主張する人は多い。この両者の結びつきに関する本格的調査、研究者として若尾五雄がいる。彼は従来の鬼研究が「精神的アプローチ」にとらわれすぎていたことを批判し、「物質文化の面からのアプローチ」をねらったという。若尾の言はこうである。

「石橋臥波、近藤喜博両氏は自然現象の人格化したものを鬼とし、馬場あき子氏は人間の心理状態に鬼を見ている。また永沢要二氏は鬼という文字の起源に力点を置いて鬼を論考している。こうした人びとの鬼へのアプローチは、いわば精神的アプローチといえよ

う。これに対し、私の鬼へのアプローチは物質面からのアプローチといえる。即ち金属自体、あるいは金属を取り扱う金土師（鉱山師・踏鞴師・鋳物師・鍛冶師）と原始修験者の鬼である。これらが鬼と密接な関係にある根拠は各地の鬼伝説に求められる。<sup>12</sup>」

鉱山、鉄、鍛冶などと鬼との関係を実証せんとして若尾は執拗なまでの調査を行なっている。例えば次のような地域の鬼伝説を取上げている。「青森県岩木山の鬼伝説<sup>13</sup>」、「岡山県吉備郡高松町吉備神社の桃太郎伝説<sup>14</sup>」、「鳥取県日野郡日南町の楽々福大社の鬼退治伝説<sup>15</sup>」、「岐阜県不破郡垂井町の中山金山彦神社（南宮大社）の鬼の掛本軸<sup>16</sup>」、「大分県東国東郡国見町鬼龍の鬼神太夫行事伝説<sup>17</sup>」、「岡山県苫田郡越畑の牛鬼伝説<sup>18</sup>」、「鳥取県日野郡日野町井原里の踏鞴伝説<sup>19</sup>」、など。

鳥取県の日野郡日南町について、若尾は次のような説明をしている。

「日南町は古来有名な砂鉄の産地であり、印賀鋼という昔から名高い良質の綱が出る。その印賀というところを中心にとると無数の踏鞴（足で踏んで空気を送る大きなふいご又はそれに用いる砂鉄を原料とした製鉄法。神代からのわが国唯一の製鉄法である）

跡がある。<sup>20</sup>」

そして、この場所に孝靈天皇が牛鬼を退治した話が伝承されているというのである。

若尾の調査、研究によっても明らかのように、各地に残る数々の鬼伝説の背景には、中央権力による血なまぐさい鉄生産集団（鉄だけに限らない）への攻撃、収奪の現実がありそうだ。

若尾のあげている岡山県の吉備津神社の温羅という鬼の話の背景にも、鉄が大きくかかわっていたようである。いうまでもなく、吉備は質のいい砂鉄が大量に採取できた地域であった。<sup>21</sup>この地には温羅という鬼がいたことになっている。温羅の形相、威力は次のようなものだった。

「温羅は身長約四メートル、目は豹のように輝き、髪は赤色を帯びて額の上には瘤があつて角のようであり、歯は上下が食い違い、物凄い様相である。その上火を吹いて山を焼き、岩をうがち、水をくんで油とすることができ。人間や猿を食い、美しい女を奪つたりする。<sup>22</sup>」

この凶暴な鬼である温羅を吉備津彦命が討伐するという話であるが、温羅の抵抗はおもいのほか強力で、

吉備津彦命の勢力が次第に衰退してゆくことになる。

そこへ住吉大明神が登場し、次のような作戦を吉備津命にさずけ、温羅退治は成功する。

「『一度に二矢をつがえて射て、一矢は食い合い、一矢が温羅に当たる』と告げた。果たしてその通りになり、この時とばかり吉備津彦命が攻めて行くと、温羅は逃げ、姿を変え、童の姿となって大岩の下に隠れようとしたが、妨げられて入れない。だが温羅は大雷雨を降らし、その流れを利用して逃げようとした。傷の血がからくれないに拡がり血の流れとなる（血水川という）。さらに鯉に姿をかえて下るところを、吉備津彦命が鵜となって食つてしまい、ついに退治したのである。<sup>23</sup>」

吉備津彦命という権力が周辺農民のためという大義名分を作為し、温羅を攻め滅ぼすという話であるが、滅ぼした後もさらしものになった温羅の首はシャリコーベになつても執拗に怨念を晴らすべく吠え続けたのである。そこで次のような結末となる。

「ある夜、ミコトの夢に温羅の霊が現われて、『吾が妻、阿曾郷の祝の娘阿曾媛をしてミコトの釜殿の神饌を炊かしめよ、若し世の中に事あれば竈の前に参り給

はば幸あれば裕かに鳴り、禍あれば荒らかに鳴ろう。  
ミコトは世を捨てて後は霊神と現れ給え。われは一の使者となつて四民に賞罰を加えん」と告げた<sup>24</sup>」  
この結末は、いわゆる上田秋成の『雨月物語』などの資料に使われている鳴釜神事である。

温羅は渡来してきてこの地に住んだ鉄生産者集団の首領ではなかつたかと推理する人もいる。いずれにしても、鉄を収奪するには、この首領を攻撃し、追隨せしめるか、抹殺するしかない。その攻撃の正当性を、なんとしても王権は作為しなければならなかつた。温羅に対する執拗な追撃は、鉄収奪に 向けてのなみなみならぬ執念を物語っている。

温羅を鉄生産者集団の神秘的、呪術的威力を持った霊的存在とみなし、王権の彼への憧憬と恐怖と殺戮とが、渦巻く世界として、この話を読む人もいる。

「古代において、鉄はその異常な呪術—宗教的な威信をそれ自体のなかに含んでいたといえる。したがつて道具をつくる技術は、本質的に超人間的であるとなされ、鍛冶師そのものの属性に、聖なるものと悪霊的なものとが付加されたといえます。産鉄集団のシャーマンであつた温羅が、大和の天皇の命によつて

誅殺されたのは、武器を鍛える超人間的な魔力を恐れ  
たからにほかならない。権力者は鉄のもつ両義的な力  
—神的存在であるか悪霊的存在であるか—の一方の側面『鉄は  
国を制する』ことの危険性を圧殺し封じこめたので  
す<sup>25</sup>」

温羅の髑髏はついに吉凶占いという神事に矮小化されてゆくが、大江山の酒吞童子はどうか。この大江山も鉱山地帯で、鉱物資源の宝庫であつたと思われる踏鞴の跡も多く見られるという<sup>26</sup>。酒吞童子は極悪非道の最たるものでありながら、なんとなく民衆の側からは好意的に見られ、大いに人気のある鬼でもある。現在、毎年十月の最終日曜日には、酒吞童子祭りが大江町で執り行われ、町はこの鬼の威力、知名度を大いに利用しながら、町の活性化をはかろうとしている。

注<sup>26</sup>でとりあげた『大江山鬼伝説考』は、そのあたりの事情を次のように語っている。

「大江町では、鬼が町づくりの尖兵となつている。  
豊かな自然に恵まれた農林業と鉱山の町であつた大江町が、過疎化の渦にまきこまれ、この三十年の間に人口が半減し、衰退の方向をとどめることができなかつたが、昭和六十三年七月北近畿タンゴ鉄道宮福線の開

通とほぼ時期を同じくして、ふるさと創生の一環として、町づくりの起爆剤として鬼伝説が甦りつつある。

『来年のことを言うと鬼が笑う』という諺があるが、その鬼に町づくりの担い手になってもらおう―その方向づけに町内賛否両論があるのも事実だが、鬼のおかげでいま大江町が脚光を浴びていることは、まぎれもない事実であり、町の活性化のいとぐちとなったことは評価しなければならぬ<sup>27)</sup>」

夜陰に乗じて現れ、金銀財宝を盗み、姫をかどわかす極悪の鬼を、いま、なぜ甦らせるのか。酒吞童子の命日を「鎌止め」とし、刃物の使用禁止をかかげ、この鬼を偲ぶのはなぜか。酒吞童子をはじめ、星熊童子、熊童子などの復活は不名誉なことにはならないのか。

しかも不思議なことは、この獯猛な鬼を滅ぼした源頼光らの顕彰も復活もないことである。超悪的逆賊であつても、町の宣伝になればよしとする打算だけで、この祭りの精神は説明可能か。鬼よりはるかに悪質で、狡知にたけた支配権力の存在を知っている民衆は、鬼の超人的暴力、威力を借りて、否そのものになりきつて、権力の前に立ちはだかり、敗北覚悟のうえでも、鉄槌をくだしたがったにちがいない。次のような推理

があつても当然であろう。

「酒吞童子を、源頼光以上の英雄にまつりあげた人々の心には、誅殺された者への哀悼とともに、シャーマン的存在としての悪党にされた「わきあがる鬼」への賛同があつたと推察できるのです。<sup>28)</sup>」

闇のなかに突き落とされ、そこを栖として生きる者にとつて、尋常な手段での解放はない。陽の当たるところで形成されてきた規範に依存したのでは、勝敗は、はなから決まったも同然である。日常の規範を打倒するには、鬼の非日常的超能力が要る。阿鼻叫喚の世界を生きる民衆にとつて、酒吞童子は神であつたかもしれない。人力を超えたパワー、神秘的力、これなくして王権が日常化している諸々の掟を打ち破ることはできないということである。

それでは、この鬼の威力、神秘的力などは、いかなるところにその淵源があるのであろうか。鉄生産技術に伴う呪術性、あるいはその集団人の漂泊性などはいうまでもないが、異常生誕、捨て子としての成育、あるいは童子の髪型などにも、そのパワーの源泉があるように思われる。生誕に際しての異常性、その後の成

育の過程をまず覗いておこう。

人間一般の生誕に較べ、かなりの異常性が鬼にはみられる。母親の体内にいる時間が十六ヶ月という異常な長さである。また、母から生れ落ちるや否や歩き、走り、話す。頭髮は黒く、齒は揃っている。親の情にも限界があり、山中、その他に捨てられることが多い<sup>29</sup>。遺棄されても死ぬことはなく、草や木の実を食い、岩清水を飲み、虎狼を仲間として成長する。つまり、村落共同体からは排除されるが、自然の懷に抱かれ、山の神に支えられながら野性的パワーを身につけて成長する。悶絶するほど酒を飲む。

酒呑童子の生誕、成長に関して次のような記述がある。

「彼本姓は、越後国、何某の妻、胎める事十六箇月にして産に臨む、苦む事甚くして、終に産み得ず、悶え死にけり、母死して後、胎内より自ら這ひ出でて、誕生の日より、能歩み、言ふ事、四五歳計の児の如し、諸人怪み恐れずと云ふ者なかりしかども、父子の恩愛捨て難して、五六歳に成るまでは、育置きしが、其人為尋常ならず、戲遊ぶ正な事までも、更に人間の所為とも、見えざりければ、父も流石恐しく覚えて、遂に

幽谷の谷の底に棄ててけり、されども虎狼の害も無く、木実を食ひ、谷水を飲みて生長し、其長八尺有余にして、力飽くまで逞しく、然も外法成就し、或は陸地に人を溺し、或は空中に身を置き、様々の術を成す。：(略)：されど童子の如く、通力は得ざれども、怪力強盛なる事、誠に無双なり、又童子酒を好む事、法に過ぎたり、一度に飲む事、甕に満たざれば酔はず、酔ひぬれば転倒悶絶して、通を失ひ力を落す、之に依て酒呑童子と呼べり、<sup>30</sup>」

異常生誕が怪力無双の源となる話はなにも鬼に限定されるものではないが、酒呑童子の場合その典型の一つといえよう。この怪力無双の鬼と闘い、攻め滅ぼすためにも、それと同等、あるいはそれ以上のパワーが要る。

酒呑童子討伐の際、源頼光に同行した四天王の一人坂田金(公)時(他は渡辺綱、卜部季武、砥井貞光)も勇猛果敢の士であったが、彼の誕生も極めて特徴的である。これも『前太平記』によれば、ある山頂で山姥が昼寝をしている時、赤龍が突然下降してきて彼女と交接する。雷鳴に驚き覚醒した時、彼女の胎内に神の子が宿っていたという。この金時、怪力があるだけ

ではなく、心は豁達大度であったといわれている。鬼を討つには、極端に秀れた神秘的力が必要だったし、その力は人知のとうていおよばぬ自然の驚異がもつともふさわしかった。金時の鉞は大木を一瞬にして頭から真二つに裂く雷光そのものであった。

人はそれが何であろうと、常識的現実世界からは、想像することさえ不可能な生誕、成育に関して、驚畏、驚嘆、軽蔑の気持を持つ。自然災害、疫病の原因をその超人的怪力のせいにしたたり、日常の被支配的状況から発酵する数々の怨念を晴らすエネルギーとして評価し、それにすがろうともする。神や自然から授かった超人的能力は、同根ではあっても、さまざまに揺れ、変容してゆく。疫病神と福の神、鬼と神、英雄と鬼など、紙一重で対立しながらも共存している。

いまひとつ、鬼の神秘的威力につながるものとして、童子という呼称に注目しておきたい。錚錚たる鬼、狂暴なる鬼がなぜ童子なのか。童子という概念は、単に純粹無垢で正直で、素朴を意味するだけのものではない。童子は時として聖なる存在で、強烈な超人的力を発揮ことがある。また、大人には許されない自由が童子には与えられている。大人が童子と呼ばれる場合は、

神にちかい存在として認定されている。世俗的世界を超えていればこそ、神の示現者ともなる。

天皇制と濃密なつながりをもった京都洛北の八瀬童子などもその一例であろう。この八瀬童子という存在は、「延暦寺の寺院権力の被支配者として、宗教的には呪的カリスマをもち、制託迦童子の浄め<sup>11</sup>護衛の役割を演じ、同時に矜羯羅童子の恭順の役割を果たし、鬼の子孫のイデオロギーをもつことになった<sup>12</sup>」ものとみられている。この八瀬童子と後醍醐天皇との関係の話は有名である。つまり、足利尊氏に追われ、比叡山に天皇が逃れ際、天皇の輿を担いだという。このようなくともあつて、八瀬の人たちは鬼の子孫であることを誇りに思い、現在もその思いはいろいろなかたちで継承されている<sup>32</sup>。

牛車の牛使いに牛飼童と呼ばれるものがあつたが、大人もこの職につく者は、童形的でなければならなかつた。網野善彦はこれについて次のような説明をしている。

「なぜ牛飼は、童形でなくてはならなかつたのか。これはたやすく解決し難い問題であるが、いま一、二の思いつきをのべれば、当時の牛車を引いていた牛が、

今日われわれが馬にくらべて穏やかな動物と考えているのとは違い、獯猛で巨大な動物とみられていたと推定される点は、恐らくこのことと無関係ではあるまい。：(略)：こうした獯猛な動物を統御する上で童の持つ呪術的な力が期待されたとも考えられるのではなからうか。：(略)：童あるいは童形の人は少なくとも中世前期までは、黒田(日出男)のいうように『聖なる存在』として、人ならぬ力を持つとされていたことは確実といつてよい。<sup>33</sup>

この童子の神秘性、聖なる存在、超俗的性格を濃厚に表現しているものに、髪型がある。つまり、童子の髪型は「禿」である。酒吞童子の姿、髪型について『御伽草子』は次のように触れている。

「雷電稲妻しきりにして、前後を忘ずる其中に、色薄赤くせい高く、髪は禿におし乱し、大格子の織物に、紅の袴を着て、鉄杖を杖につき、刃をにらんで立ったりは、身の毛もよだつばかりなり。<sup>34</sup>」

髪の子義をたどつていけば、「神」とか「上」が浮上してくる。ことに「神」に通ずるということであつてみれば、短いより長い方がいいということになる。結髪よりも「禿」に軍配があがるというものだ。酒吞

童子は、何歳であろうと、彼の髪型は「禿」であつた。神事を任とする人が、髪は結はずとも是とされてきたことは、『日本書紀』などにもみられるところである。

高崎正秀は、髪と「神」・「上」との関係を次のように説明している。

「わらはは髪形であつて、其の年令に關係しないことは、八瀬童子を親しく見た人には、納得がゆく筈である。：(略)：古代には髪を神聖視し、これを生命の拠り所と考へる風があつた。これも世界的拡布を有する思想であるが、我が国語の髪は、やはり神、上と同源に発する、神聖感を持った言葉であつたのだ。これをわらははに切つたのが、子供の本格の姿である処から、わらははと云へば童の字を訓むことになつて了つたのであらう。<sup>35</sup>」

異常生誕・捨て子・鉄生産・漂泊・怪力無双・反体制・反社会・反倫理などが鬼の属性であるが、それを單純に許すほど、現実世界の掟は甘くはない。狡知に富んだきめ細かい網の目がはりめぐらされている。

鬼の復権を叫ぶ人もいるが、己の心の中に鬼になり切ろうとする勇氣のない人たちのその叫びは、結果と

して王権を強化するための叫びでしかない。演劇の舞台に登場する鬼の姿もその仮面も、どこことなく可愛らしく、弱々しく、恐怖も畏敬の念もない。観光客の酒の肴にまで零落しているのだ。本来、漆黒の夜でこそ活躍可能な鬼が、昼の陽光の世界に引きづり出され、その無気味な情念的怪力は、次第に削がれてゆく。商品化された「情念」や「怨念」が、ショーとして演じられる風景があるばかりである。

正しい歩きぶりのなかにこそ存在する鬼の根源に還ることは、今日、はたして可能か。人間界において加害者として擯斥されている鬼は、体制内の常識を打破するため、いかなる方途とエネルギーを準備しているのか。それとも全身血にまみれ、正義のために狂い、漆黒の夜、渾沌の世界を生きぬくことを生の歓喜と断言できる鬼の原初的精神は絶滅してしまったか。松永伍一の次の発言を引用して、本稿はひとまず閉じることにする。

「罪の意識などぎりぎりの生にとつては無用の長物なのである。上層のあいだでは知識として仏教が浸透しつつあったから罪の意識は聖徳太子の頃から口にされてきたようだが、これほど偽善的なものがあるのか。

飢えている衆はみずから鬼となり、獣に近づき、狂いつつ生きる道を探るしかなかったのである。罪を持ち出し、倫理を説くのは、支配者の思想であり、圧制の論理である。<sup>36)</sup>

注

- 1 谷崎潤一郎「恋愛及び色情」『婦人公論』昭和六年四月―六月、『陰翳礼讃』中央公論社、昭和五十年、一〇四頁。
- 2 同上書、一〇五頁。
- 3 市古貞治校注『御伽草子(下)』岩波書店、昭和六十一年、一八九頁。
- 4 小松和彦『フォークロー』第一号、木阿弥書店、平成六年二月、三四頁。
- 5 古市、前掲書、二〇三―二〇四頁。
- 6 沢史生『閉ざされた神々―黄泉の国の倭人伝』彩流社、昭和五十九年、二八三―二八四頁。尚、最初の追儺行事は、七〇六年、文武天皇の時と『続日本紀』にはある。
- 7 柳田国男『定本・柳田国男集』第四卷、筑摩書房、昭和三十八年、一七七―一七八頁。
- 8 磯部浅一『二・二六事件獄中日記』橋川文三編集・解説『超国家主義』(現代日本思想大系(31))筑摩書房、昭和三十九年、一六八―一六九頁。
- 9 馬場あき子『鬼の研究』筑摩書房、昭和六十三年、一五頁。

- 10 沢史生、前掲書、二〇六頁。
- 11 柳田、前掲書、四六八頁。
- 12 若尾五雄『金属・鬼・人柱その他』堺屋図書、昭和六十年、五六〜五七頁。
- 13 同上書、五七頁。
- 14 同上書、五八頁。
- 15 同上書、五九頁。
- 16 同上。
- 17 同上。
- 18 同上書、六〇頁。
- 19 同上書、六一頁。
- 20 同上書、五九頁。
- 21 沢史生は吉備の国についてこういう。「真金吹く吉備の中山帯にせる 細谷川の音のさやけさ(古今和歌集)、真金吹く細谷川の音にのみ 聞き渡りにし吉備の中山(連歌師・玄的)、動きなき君の御代かな真金吹く吉備の中山ときわかきわに(内蔵権頭 善滋朝臣為政)などと歌詠みされた吉備の中山、つまり吉備の王国は、真金吹くところのようにカネ吹き場の、鉄の産地であった。のちに備前鍛冶、備中鍛冶、備中鋳物師の繁栄したところが吉備だったのである。これらの鍛冶・鋳物師集団は、瀬戸内海に浮かぶ大槌島・小槌島を、神山として崇めたという。産鉄・鍛鉄の聖地が、いかに広範なものであったかがわかる。」(『鬼の大辞典―妖怪・王権・性の解説』彩流社、平成十三年、五八七頁。
- 22 立石憲利『岡山の伝説』日本文教出版株式会社、昭和四十四年、四二頁。
- 23 同上書、四四頁。
- 24 藤井駿『吉備津神社』日本文教出版株式会社、昭和四十八年、七〇頁。
- 25 大橋忠雄『民話の中の被差別部落像』明石書店、昭和六十年、一二九頁。
- 26 大江町と鉾山の関係については、次のように、いわれている。「酒呑童子伝説を色濃く残す大江町仏性寺は、つい最近まで日本鉾業河守鉾山があったところだし、旧三岳村にも古い鉾山跡が残る。また上野条や天座の含まれる地域は、鉾山を連想させる金山郷と呼ばれたところである。」(大江山鬼伝説一千年祭実行委員会鬼文化部会編『大江山鬼伝説考』平成二年、九六頁。)「大江町字北原に古いタタラ(製鉄所)の跡があるのが目をひく。このタタラの跡は、奥北原から大江山へむかう旧道東側の谷の奥で、通称魔谷といわれるところにある。付近には鉄をふきかけたカナクソが残り今もかすかに確認できる。」(同上書、九八頁。)
- 27 同上書、「まえがき」
- 28 大橋、前掲書、一二九〜一三〇頁。
- 29 佐竹昭広の説明を引いておこう。「不思議な誕生をした子どもが深山に捨てられ、山の動物に守護されつつたくましく成人し、威力を世に振るうというモチーフは、中世口承文芸の典型的な一類型であった。この類型を、山中異常誕生譚『捨て童子』型と命名することができよう。伊吹童子、役行者、武蔵坊弁慶、平井保昌、かれらはおしなべて山中の『捨て童

子」だったと言える。」(『酒吞童子異聞』平凡社、昭和五十二年、三四頁。)

30 「前太平記」『物語日本史大系』第二巻、早稲田大学出版部、昭和三年、二二二―二二三頁。

31 池田昭『天皇制と八瀬童子』東方出版、平成三年、八〇頁。

32 『八瀬童子会文書』には次のように記されている。「八瀬童子が皇室とのかかわりを誇りとしていたことは、前近代からのことであるが、かかる伝統は現在においても、妙伝寺での念仏講にみることができる。：(略)：仏事の内容とは、八瀬童子が大きな恩敬を被ったところの後醍醐天皇や明治天皇から(各皇后も含む)昭和天皇まで、また老中秋元元喬や近衛家の者たちの各菩提を弔うため、読経に天皇・皇后名や各戒名を何度も繰り返し読み上げるといったものである。」(京都市歴史資料館編、平成十二年、一五頁。)

33 網野善彦『異形の王権』平凡社、昭和六十一年、四九―五〇頁。

34 市古、前掲書、二〇〇頁。

35 高橋正彦『金太郎誕生譚』桜風社、昭和四十六年、二九―三〇頁。

36 松永伍一『原初の闇へ』春秋社、昭和四十六年

主要参考・引用文献

網野善彦『異形の王権』平凡社、昭和六十一年

池田昭『八瀬童子と天皇制』東方出版、平成三年

市古貞次校注『御伽草子』(下)、岩波書店、昭和六十一年

猪瀬直樹『ミカドの肖像』小学館、昭和六十一年

宇治谷孟訳『続日本記』(5)講談社、平成四年

大江山鬼伝説一千年祭実行委員会鬼文化部会編『大江山鬼伝説考』平成二年

大橋忠雄『民話の中の被差別部落像』明石書店、昭和六十年

大和岩雄『皇と天皇』白水社、平成四年

萩原秀二郎『鬼の復権』吉川弘文館、平成十六年

片柳庸史編『フォークロア』第一号、木阿弥書店、平成六年

京都市歴史資料館編『八瀬童子会文書』京都市歴史資料館、平成十二年

熊瀬川恭子『鬼の意味とその変遷』『季刊人類学』二十巻四号、

京都大学、昭和六十四年

倉本四郎『鬼の宇宙誌』講談社、平成三年

黒田日出男『境界の中世・象徴の中世』東京大学出版会、昭和六十一年

小松和彦・内藤正敏『鬼がつくった国・日本』光文社、昭和六十

年

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀』(5)

岩波書店、平成七年

佐竹昭広『酒吞童子異聞』平凡社、昭和五十二年

沢史生『閉ざされた神々―黄泉の国の倭人伝』彩流社、昭和五十九年

沢史生『鬼の日本史』上・下、彩流社、平成二―三年

島内景二『御伽草子の精神史』ぺりかん社、昭和六十三年

- 高崎正秀『金太郎誕生譚』桜風社、昭和四十六年
- 高平鳴海・糸井賢一・大林憲司・エー アイ スクウェア『鬼』  
新紀元社、平成十一年
- 立石憲利『岡山の伝説』日本文教出版株式会社、昭和四十四年
- 田辺美和子「中世の『童子』について」『年報・中世史研究』九  
号、昭和五十九年
- 谷川健一『青銅の神の足跡』小学館、昭和五十四年
- 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』中央公論社、昭和五十年
- 知力光歳『鬼の研究』大陸書房、昭和五十三年
- 鳥居フミ子『金太郎の誕生』勉誠出版、平成十四年
- 中村光行『鬼の系譜』五月書房、平成元年
- 服部邦夫『鬼の風土記』青弓社、平成十年
- 馬場あき子『鬼の研究』筑摩書房、昭和六十三年
- 藤井駿『吉備津神社』日本文教出版株式会社、昭和四十八年
- 松永伍一『原初の闇へ』春秋社、昭和四十六年
- 南清彦・藤原重夫『鬼の絵草紙』叢文社、平成十年
- 柳田国男『定本・柳田国男集』第九卷、筑摩書房、昭和三十七年
- 柳田国男『定本・柳田国男集』第四卷、筑摩書房、昭和三十八年
- 若尾五雄『金属・鬼・人柱その他』堺屋書房、昭和六十年